

私は「差別する人」か

「差別される人」か

糸島市校区人権・同和教育指導員 笹尾 暁

私と人権との出会い

「差別する人」と「差別される人」とに私たちは二分されるのだろうか。ふと、考えた。私はどちらだろうか。前者ではない、後者でもない、と思いついていた。

南風支部の指導員になって9年になる。この間、たくさんの学ぶ機会を与えられた。校区の先輩から「解放学級（※）でいろんなことを学んだよ」と聞いていたので、私は解放学級に自分も行くとうと決めた。それで、校区指導員会の最初の集まりのときに解放学級を紹介していただいた。初めて参加した解放学級に同じ校区の女性がいて、以来、一緒に人権の学びを続けている。人権について学ぶことは、私にとっては私自身の歩

「これは差別ではないか」と思った。婚姻に至る養子縁組の決め手が身元調査だったとは。

孫から祖父母へ

孫である私は、祖父母と祖母の両親に冥界で会ったら、「身元調査は人権侵害」と言おうと思う。多分、祖父母も祖母の両親もそのような意識はなかっただろう。私が「おじいちゃんおばあちゃん、それはおかしい」と言っても、「この孫の言うことは分からない」と言うに違いない。さらに私は言う、「おじいちゃんおばあちゃんもひどい人権侵害を受けたよ」。祖父母は、「また分からんことを」と首をかしげるだろう。私は言う、「長崎に原子爆弾が落ちて…。骨つぼには何も入っとらんよ」。

祖父母の結婚

父が残した自叙伝を読んだ。私の祖父母の婚姻についての記述がある。当時長崎で暮らしていた祖母は3姉妹の長女、両親は長女の婿を養子にと考えたようだ。祖母は近くのキリスト教会に通っており、宣教師の通訳をしていた英文学科の苦学生が候補となったようだ。祖母の両親は身元調査をし、その結果に祖母も満足したらしい。

初読の際は気づかなかったが、2、3年前にあらためて読んだとき

先入観では済まされない

20年ほど前のこと。私が帰宅したときの妻との会話。「○○さんたちが来て、ぜひ区長をとって」「ぼくに？」「私に！」「やってみたら？」。思い返すと赤面してしまう。私の潜在意識は「区長は男性」との思い込みがあったのだろう。

またあるとき、妻とデパートに調理器具を買に行った。目的のものを物色していると女性の店員さんが来て、あれこれと説明をし始めた。ふーん、なるほどねと聞いている。店員さんは一生懸命、妻に説明している。妻は戸惑った顔をしている。私は少々、ご機嫌斜めな表情をしていたに違いない…。調理器具を探していたのは妻ではなかった。

「男のくせに」「女のくせに」とか、「○○のくせに」など、口にしたり耳にしたりしたことはありませんか。これらは、日常のさりげない言葉の中に潜む私たちの差別意識、人権侵害ではないでしょうか。

私は「差別する人」になることも「差別される人」になることもあるようだ。

(※)解放学級…かつて識字学級と呼ばれた、差別によって文字を奪われた人たちの学びの場